

自閉症的完全さ (autistic integrity) の倫理 D.バーンバウム『自閉症の倫理』の視点から

著者	柴田 正良
著者別名	Shibata, Masayoshi
雑誌名	自閉症のための諸科学の協働（金沢会議2011）発表資料
ページ	11p.
発行年	2011-10-10
URL	http://hdl.handle.net/2297/43062

自閉症的完全さの倫理

D. バーンバウム『自閉症の倫理』の
視点から

柴田正良（金沢大学・哲学）

自閉症のための諸科学の協働（金沢会議2011）

石川県政記念しいのき迎賓館

OCT. 10, 2011

『自閉症の倫理学』

THE ETHICS OF AUTISM

D. R. BARNBAUM, 2008, INDIANA U. P.

この著作に対する書評：

“Does autism need a cure?” , by Simon Baron-Cohen, www.thelancet.com Vol 373

◆ この著作の主な主張は2つ。

1. 自閉症者は、他者理解の点で、非自閉症者とまったく異なる世界に住む。
2. 成人の自閉症者を「完治させる」必要はない。また、人格の自律性と最善の利益という観点からは、「完治させる」べきではない。

キーコンセプトとしての 心の理論 (THEORY OF MIND)

◆ バーンバウムは、倫理における自閉症者の根本的困難が心の理論の欠陥からくると考える。

■ 自閉症の原因を説明する3つの理論

1. 心の理論説 (theory of mind thesis)
2. 中心性統合弱化説 (weak central coherence thesis)
3. 実行機能弱化説 (weak executive function thesis)

心の理論を欠くとは どういうことか？

1. 心の理論は、他者の志向性を自分とは違った自律したものとして理解し、自分と異なるどんな心的状態（欲求・信念・情動など）が他者に生じているかの推論を可能とする。

2. その欠如は、心的存在としての他者がまるで存在しないかのような世界を自閉症者に強いる。したがって、彼らは他者との相互交流、相互信頼を築くことが極めて困難となる。

自閉症を「完治させる」ことは、心の理論を回復させることを意味する

★ しかし、心の理論の回復は、失われた視力の回復や歩行機能の回復とは根本的に異なる。

▼心の理論の回復は、それを持たなかった人にとって、人格の本質的な部分の改変を意味する。

なぜなら、彼らは、われわれとはまったく異なる世界、いわば他者が存在せず、他者との生活を共有せず、人生の客観的な善さの数々を経験しない世界を生きていたからである。

なぜ大人の自閉症者を 「完治」すべきではないのか？

1. 誰であれ、自律した「人格」を持つ者に対して、何であれ、「別の人（人格）になれ」と要求することは、人格の尊厳を踏みにじることだからだ。
2. 他者が存在し、他者を無視しえない世界で新しく生きることは、彼らに喜びよりも苦難を多く強いることになるからだ。

自閉症者の声

- ▲ 「僕らは病気なんかじゃない。だから「完全に直る」なんてありえないんだ。これが僕らの生き方だよ」 (ibid., p. 204) … Jack Thomas. (20歳前後)
- ▲ 「もし指をパチンと鳴らすだけで自閉症でなくなるとしても、私はそうしたくはないわ。だって、そうしたら私は自分でなくなるもの。自閉症は私の一部なのよ」 (in Simon Baron-Cohen, 2009)
- ▲ 私は完全に直ることによって「視覚で考えるという自分の能力を失いたくないの。私は、この大いなる連続性の中に自分の居場所をもう見つけているのだから」 (ibid., p. 177)
… Temple Grandin (コロラド州立大学教授)

バーンバウムの議論の含み

1. 心の理論の欠如は、自閉症者の人格の完全性を損なわない。 → 自閉症的完全さ
人格の自律性+自己決定 → 成人の自閉症者が自ら望むなら、「完治」は道徳的に許される。
しかし、この場合の「完治」は「別の完全さ」の獲得を意味するがゆえに、それは、「不完全なものを完全なものに直す」ことではなく、彼が別の人格を選択したことを意味する。
2. 自閉症者の最善の利益にとって、心の理論の回復がむしろプラスよりもマイナスの結果を生む可能性が大きい。 → 環境の激変に対処するコストの方が、新しい環境から受けるベネフィットより大きい。

自閉症的完全さは、本当に完全か？

- ★ では、なぜ自閉症者の出生を拒む点で両親は倫理的に正当化される、とバーンバウムは主張するのか？
- ▼ 彼女の答えは、子どもは開かれた未来 (an open future) に対する権利を持っており、両親はそれを制限するようなことをしてはならない、というものだ。つまり、自閉症は子どもの未来の選択 (自律性) を極端に狭める。



- 「自閉症的完全さ」という言葉は、自閉症を美化するためのものではない、という彼女の主張は、自閉症者の世界を、「もし無から選べるならば選ぶべきではない世界」と捉えている証である。

異世界の住人との共生の倫理

- ★ 我々はそこに住もうとは思わないが、そこに住んでいる彼らも、我々と同じ自律した人格の「完全さ」を持つ。
- ▼ 彼らは、まったく逆に、同じことを主張するかもしれない。「我々はそこに住もうとは思わないけど…」
- 自閉症が子どもの開かれた未来を制限する、というのが真実なら、それでも、さまざまな「完全さ」がある、と言えるのだろうか？「能力における不完全さ」と「人格における完全さ」…
- ◆ これは、自己決定なら倫理的に許されるが、他者決定なら倫理的に許されない、ということだろうか？

おしまい（一部、発表時からの修正あり）。

文献：

Baron-Cohen, S., “Does autism need a cure?” ,
www.thelancet.com Vol. 373

Barnbaum, D. R. *The Ethics of Autism*, Indiana U. P., 2008.

Grandin, T., *Thinking in Pictures and Other Reports from My Life with Autism*, New York, 1995.

Shibata, M., “Toward robot ethics through *the Ethics of Autism*” in J. L. Krichmar and H. Wagatsuma (eds.), *Neuromorphic and Brain-Based Robots*, pp. 345–361, Cambridge U. P. , 2011.

柴田正良、「異世界の者たちの倫理」『哲学・人間学論叢』創刊号、金沢大学哲学人間学研究会、pp. 17–37, 2010.